



TITLE:

<批評・紹介>梅原郁編 「中國近世の都市と文化」

AUTHOR(S):

伊原, 弘

CITATION:

伊原, 弘. <批評・紹介>梅原郁編 「中國近世の都市と文化」. 東洋史研究 1985, 43(4): 727-734

ISSUE DATE:

1985-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153969>

RIGHT:

梅原 郁編

中國近世の都市と文化

伊原 弘

近年、都市研究が盛んである。いや、盛んになりつつある、というべきであろうか。本書の序言にもいうとおり、都市とは洋の東西を問わず魅力的なテーマである。都市に関する様々な定義は別にしてイメージのみをかかげるならば、雑踏や華やかさ、文化の香り、またそれ故の猥雑さや頹廢性など、渾沌ともいえる多くのイメージが登場する。限られた一定の面積しかなく、そのみでは生きていくことのできぬ土地、に人人がひきつけられていくのは何故だろうか。純粹な都市論とは別に、こうした素朴な興味や疑問がわいてくる。

本書は、京都大學人文科學研究所における昭和五三年四月から昭和五八年三月までの五年間にわたる共同研究「中國近世の都市と文化」を基礎にして、参加者が各専攻分野・關心の中で都市に近い部分を提出しあったものである。同研究會ではすでに成果の一端である『東京夢華錄夢粱錄等語彙索引』を昭和五四年に人文科學研究所より刊行しており、近近『名公書判清明集』の譯註書の刊行も豫定しているとのことである。このほか『夢粱錄』の研究もすすめるなどの活潑な活動の上になった本書は、都市に関する様々な興味・諸

問題を示したものの、ともいいえよう。しかし、正直なところ、それ故に個人の書評の能力の限界をこえていたことも素直に告白しておかねばならない。なお、一言しておかねばならないのは、あつかった時代の認定についてである。宋代を主體にしつつもタイトルを『中國近世の都市と文化』としていることから察せられるように、宋代を近世としてあつかっている。周知のように、宋が中世か近世かは長く深い論争のあるところである。認定のちがひによって都市へのアプローチ・認識も異なってくる。しかし、限られた紙幅では論の展開にも限界があるし都市論の章があるわけでもないので、ここでは特に言及しない。

本書の構成は以下のとおりである。

南宋の臨安	梅原 郁
宋都杭州の商業核	斯波義信
宋元時代の杭州寺院と慈恩宗	竺沙雅章
杭州臨安府と宰相	衣川 強
宋代杭州及び後背地の水利と水利組織	本田 治
陳起「芸居乙稿」を読む	深澤一幸
西湖をめぐる繪畫——南宋繪畫史初探——	宮崎法子
唐代の揚州城とその郊區	愛宕 元
唐宋時代における蘇州	礪波 護
宋代の都市商業と國家——市易法新考——	宮澤知之
宋代の都市と教育——州縣學を中心に——	川上恭司
文昌帝君の成立——地方神から科學の神へ——	森田憲司
中國近世における地方都市の發達	

——太湖平原烏青鎮の場合——

林 和生

上海縣の成立——江南歷史地誌の一齣として——

秋山元秀

クビライと大都

杉山正明

このほか別刷附圖として以下の地圖がふしてある。

梅原郁論文關係地圖

南宋臨安坊廂橋梁圖・南宋臨安官署軍營宅圖

斯波義信論文關係地圖

宋杭州卸賣組織分布圖・宋杭州著名店鋪分布圖

磯波護論文關係地圖

宋代紹定二年原刻、中華民國六年八月深刻『宋平江圖碑』拓本

秋山元秀論文關係地圖

上海附近主要水系圖

内容は多岐にわたり、数も多い。收められた十五編の論文のうち杭州を對象にしたもの七編、そのほか大小を問わず特定の都市を對象にしたもの五編、不特定の都市を對象にしたもの三編。いわゆる都市論を缺き、しかも必ずしも都市的なものといえぬものもないではないが、様々な角度からアプローチがなされていて、都市に関する關心や研究の現状を知りうる。いいかえれば、都市の問題とは、各分野から手をのばしうる學際的テーマであること、しかしそれだけにそれぞれのアプローチ法が交錯してなかなか實像をむすびにくいテーマであることを知りうるのである。

周知のように、我國の中國都市研究はかなりの成果を收めてきている⁽¹⁾。宋代の都市研究についても、加藤繁氏の高論以來、唐宋間にあらわれた都市の一大變化をターニング・ポイントと意識しつつ、

各分野に多大の業績を收めてきた⁽²⁾。本書もまたこうした線上に存在し、しかも唐宋以後の都市問題に関するはじめての論集としても注目に値する。

さて、もう一つ問題がある。ここにあげられた諸問題が、最近多くの成果をあげつつある外國での中國都市研究、あるいは日本史などの分野での都市研究の成果と如何に對應するのか、對應しうるか、である。我我もまた時代の子であるならば、この點はおおいに注意すべきであろう。そうした意味で、たとえば G. W. Skinner (ed.), *The City in Late Imperial China*, Stanford University Press, 1977. などは手早い比較の對象となる。我國での総合的な論文集をあげても『中世史講座 3・中世の都市』(學生社、昭和五七年)、中村賢二郎編『都市の社會史』(ミネルヴァ書房、昭和五八年)、『講座日本の封建都市』一―三(文一総合出版、昭和五六―五八年)など、いくつかあげうる。本書に所收された論文の中には、これらの諸書に所收する論文やテーマに對比しえたり好一対たる論文・テーマも多い。しかし、總體的にみれば方法論その他においてもかなりの違いがあることを認めなくてはならない。いずれが是、いずれが非というのではない。中國以外の都市に関する諸書、諸論の中に中國の都市に関する言及の乏しいのを残念に思うと共に、その原因を中國史の分野からも自省する必要がある、といいたいのである⁽³⁾。そうした點から考えると、各區分・各章ごとにタイトルをつけても良かったのではないかと思う。本書の狙いや構成が一層明らかになったのではあるまいか。それと今一つ、これは無いもの強請りではあるが、都市の行政・法に関する論文のないことが残念である。中國の都市は自治なきマンダリンの都市であるとか、中國の都

市は西歐はど都市と農村がはっきり分れぬ、といわれて久しい。その故か、この種の研究は多くはなく、方法的にも苦しい⁽¹⁾⁽²⁾。しかし、例えばオート・ブルナーも指摘するように、「東洋的」となづけられる都市形態の中にもいくつもの變化・特色があり、しかもこれは「普遍的都市類型」と考えて追求することが可能なのである⁽⁴⁾。中國の都市にもそれなりの法・慣行が支配していたのは過去の研究からも明らかであるから、「特殊ヨーロッパ的」都市にひきずられない對應する研究がここにも必要だといわなくてはならない。すこし構成について筆をさすぎたようである。以下、各論を紹介しよう。

梅原郁「南宋の臨安」は、臨安すなわち杭州の復元を意圖する。成果は詳細な二葉の地圖として集約される。こうした地圖の作成こそ都市研究にもっとも必要な基礎的作業でありながら、從來は十分に検討・評價されていなかった作業である。現在、評者も宋代建康府の復元圖を作成しているが、想像以上に繁雜な作業である。作成された二葉の地圖の價値は非常に高く、今後の杭州研究に多大の寄與をするものである。所收の他の地圖も同様で、所收の各論文と對比させると興味がつきず、臨安市内を歩いている錯覺すら生じる。ただ贅澤をいわせてもらうと、梅原・斯波兩氏の地圖は、縮尺は同じなのに大きさが異なりやや不便である。足立喜六『長安史蹟の研究』所收の地圖のように、ベースになる地圖をつくり、その上に透明な紙に作成した地圖を重ねあわせられるよう工夫してもよかつたのではないか。最近の印刷・コピーの技術の長足の進歩はかなりのことを可能にしており、地圖が成果の一端をなす論文集だけに、無いもの強請りがしなくなる。それと今一つ、版權の關係があ

るかもしれないが、ベースになった地圖も欲しい所である。

斯波義信「宋都杭州の商業核」は、周知のクリスタル、レッシュ、スキナーと續く研究の線上に展開される論である。いわば記號論的論文ともいえ、その他の論文でも指摘・示唆されたいくつかが、やはり記號化されている。氏の都市に關する新しく幅廣い知識が縦横に驅使されていて、都市及び都市圏を含めた一つの地域の實相が浮びあがる。ただ、都市内部のみならずその周邊に存在する複雑な地形、人口密度、經濟的發展度の差、移動手段や道路の整備状況さらには方法によっても生じる移動時間や移動距離の違いを考えると、氏の作成された整然とした六角形のセルがどこまで有効性をもつか、壓倒的な理論の展開に懨伏しつつも疑問に思わざるをえない。

竺沙雅章「宋元時代の杭州寺院と慈恩宗」は、杭州における普通の寺院をあつかう。宋の南遷により華北から慈恩宗もまた南にうつり、それにともなつて城内にいくつかの寺院がもうけられている。示された地圖によると、城内の南北に集中されて建寺され、しかも寺町という程でもないが、大體一キロメートル平方の中に收まっている。これらの寺は「街の寺院」としての性格がつよいようであるが、それだけに城内での寺院の集中地域がはっきりしている點に注意をひかれる。斯波氏の作成された商業核關係の地圖と比較検討すると一層興味深い。通常、寺院では市がひらかれたりするが、案外いわゆる商業區との關係がはっきりしない。ただ城内北部の寺域には燈心關係の卸賣組織、南部の場合は珠子・藥關係の卸賣組織があるというのはいくらも示唆的である。評者はかつて蘇州城内の構造を論じたが⁽⁵⁾、その際に寺觀の宗派は留意しなかつた。しかし、このように宗派も限定して分析していくと、城内の居民の性格の分析など

にも示唆を與えるかもしれないと考えた。

衣川強「杭州臨安府と宰相」は、南宋史を彩る秦檜・韓侂胄・史彌遠・賈似道の四人の宰相と臨安の關係を論じる。タイトルから豫想されるような權力者の都市政策論とは異なり、權力者達の居住地を政治勢と関連づけて論じるが、秦檜が宮城から一・五キロメートル、韓侂胄が七〇〇メートル、史彌遠が五〇〇メートル、賈似道が六・六キロメートル程の距離に邸宅を構えて皇帝に相對したといわれても、實のところ意味が判りにくい。權力者達の居住地を探り、政治機構と權力の實相を探るころろろが無意味とはいわないが、その爲にはさらに深いアプローチが必要なのではあるまいか。邸宅を構えるには都市の事情や個人の好みもある。相當の趣味人だった賈似道とその他の三人には當然違いがあるはずである。このほか權力者を取りまく人人の居住地、時代による都市構造の變化も影響したと思われる。これらが明らかになれば、一層意味が深くなる。また、これらが地圖上に押えられれば一層興味が深くなる。

本田治「宋代杭州及び後背地の水利と水利組織」は、杭州という巨大な人の集住地を支える水系の研究である。國都およびその周辺の多量のそして多目的の水を供給する素水系が意外に狹隘であること、管理に王朝が強い關心を抱いていたことなどが立證される。こうした一定の地域の正確な把握は、鎮市の分類・耕作地及び作物の分析とあいまって、都市と後背地の實態を明らかにするものである。このような分析はすでに斯波氏によっていくつかの地域で試掘がおこなわれており、各地の機能空間の構造を明らかにする。本田氏が最初にのべる通り、この種の研究は疊積・擴大をして、やがて全體を論ずるものではない。しかしいくつかの地域の詳細な研究の

上に王朝の支配や意圖を探ることは可能なのであり、研究が城内に及び、さらにいくつかの異なる地域の實態が明らかになるのを望む。

ここまで讀了すると、杭州とそれを取りまく實態がかなり明らかになる。では杭州内の文化活動はどうだったのか。中國の都市には歴然とした文化がなかったとしても、城内に文人達もすんでいる。次の二編はこの點に關與する。周知のように、こうした問題についてはジェルネの一本がある⁽⁶⁾。しかし、本書の二編は對象をしぼってよりヴィヴィッドに論じる。

深澤一幸「陳起『芸居乙稿』を讀む」は、南宋代の杭州の市井の本屋の主人陳起の詩集「芸居乙稿」を繙きながら、杭州にアプローチする。何處にでもいような文學好きの本屋の主人の作品の中に浮びあがる市井の様子には興味をひかれる點が多い。中國では感じられないとされがちな都市文化の一面が浮彫りになる。書店の位置を諸地圖で檢索すると商業核に位置しつつも寺院集合地區にも近い。居住區としてははずれのようであるが、それだけに行動様態もしはれる。

宮崎法子「西湖をめぐる繪畫——南宋繪畫史初探——」は、臨安の西によこたわる西湖の繪を論じる。一般に都市化がすすむと田園などの風景が好まれるという。密集した街に住む人人がひろびろとした景色にあこがれるのは當然といえは當然で、人工的な區劃・建造物の中に住む人人は天然が期せずしてつくりあげた、それ故に人の心の琴線に響きかける景色にあこがれるのである。西湖は人の手がかかり入った景色であるが、それでも四季折折の楽しみになったのはその故であろう。ところが西湖の實景描寫と目される繪は意外にすくなく、李嵩『西湖圖卷』がのこるぐらいという。また、當

時すでに繪葉書の繪畫が流布していたことも指摘されるが、北宋の王安石に「觀明州圖」の詩があるのを勘案すると、まことに興味深い。

従来、美術史の論文といえ、すくなくとも我々の目にふれるものは名畫をテーマにしたものが多かった。しかも方法的には形式から入っていく。こうした中で、さほど注目されなかった『西湖圖卷』に絞って論を展開するのは新鮮で、いまはやりの都市の記號學にも通じる面があるように思う。思うに、藝術の分野でもっとも先鋭に時代を反映していくのは、繪畫・ファッションなどのすぐれて視覺的藝術ではあるまいか。宮崎論文は美術史のあたらしいジャンルへの挑戦と、究極に雪舟の繪がある点においても興味深い。

杭州に關する專論は以上で一段落する。これにつぐ二編は唐宋時代江南の地方都市についてである。

愛宕元「唐代の揚州城とその郊區」は、大運河の支點として繁榮した揚州を論じる。考證は多岐にわたり、城内外の復元がめざされる。周辺の地形的變化が揚州の衰退にかかわり、唐代に揚一益二といわれたほどの都市がやがて眞州にとってかわられた理由も指摘する。氏得意の分野であり、手馴れた得物を打ち揮っているのを見て、いろいろな小氣味よさがある。こうした文獻學的な都市の復元・考察は遺蹟の上に新市街が展開して發掘調査が困難な時には多大の効果をあげうるし、同時に地下遺蹟の推定や部分的發掘と照合による實態把握に役立つ。

礪波護「唐宋時代における蘇州」は、評者もかかわってきた宋代の蘇州圖『宋平江圖』を利用しての蘇州論である。平江圖はアンドリュース・ボイドの紹介によれば、スケールが三千分の一と推定され

る詳細な石刻地圖である。⁽⁷⁾こうした地圖は一定の解讀法を確立すれば有効な史料となる。本論は平江圖に關する拙論への批判もかねている。これらの點はいずれ稿を改めてのこととするが、宋平江圖によつて解讀しえた基本的事柄に修正するべき點はないと考えていることを一言しておく。なお、宋平江圖は、すでに森鹿三氏が「栗棘庵所藏輿地圖解說」の脚注で指摘され、礪波氏も指摘されたように、葉德輝深刻以前と以後のものがある。人文科學研究所は兩種所藏している由であるが、東洋文庫にも兩種所藏されている。また『中國地圖學史』には原石全體を示した寫眞が掲載されていることも附言しておく。

中國の都市研究の最大の缺點は國都クラス以外の都市の實態がなお不明なことであらう。揚州・蘇州が地方都市といつても實はかなり巨大な都市であることはいわずもがなのことである。しかし、現實にはこのような都市の研究も不充分なのであり、着實に裾野をひろげていくより方法はないように思う。ちなみに、昭和五九年三月二日づけの朝日新聞夕刊の宿白・岸俊男氏の對談「平城京のモデルは？——日本の都城制と隋唐の都城——」で、宿白氏は考古資料の出土はないとしつつも、文獻的には隋・唐以前の南朝の城は柵しかなかったとされている。概念にとらわれず中國の都城の變遷を考察していく必要がある。

以上の二編は江南の地方都市の變遷、ひいては唐宋間の都市の變化にも及ぶ論であったが、以下の三編は都市的なものを追う。

宮澤知之「宋代の都市商業と國家——市易法新考——」は、王安石の新法の一つとして名高い市易法をとりあげる。市易法は都市の流通の圓滑化と低利での資金貸付けによる中小の商人の保護をめざ

したものと理解されている。論は市易法に詳細な検討を加える形で展開するが、同時に流通機構の發達という時代の趨勢の中で結局廢止されていくとする。

川上恭司「宋代の都市と教育——州縣學を中心に——」は、州縣學の問題を通して都市を論じる。ただ正直な所、都市と關連して論じるための具體的な検討はこれからで、基礎作業といった感がつよい。建學にイニシアティブをとったとしてあげられた人物の性格も不明なものがある。州縣學を創建したからといっても建設者の基盤が都市であつたか否かは不明であり、評者もかつて注目し指摘した郷飲酒禮などの具體的な検討が必要なのは氏が述べられる通りである。

森田憲司「文昌帝君の成立——地方神から科擧の神へ——」もまた科擧制に關する。都市の神としては城隍廟が有名であるが、ここでは士大夫達が科擧及第を願う神についての考察である。科擧神の登場という點で興味をそられる論稿である。周知のように我國の場合、菅原道眞すなわち天神様が勉擧の神となる。これに對して中國では儒教關係者でなく、蜀の地方神が科擧の神となるというのがまことに面白い。しかも四川出身者の進出が信仰の擴大に關與するという指摘にも興味をひかれる。神神は征服するというのが、これにかかわる四川の學風はどのような影響を與えたのであろうか。武人關羽への信仰がいつのまにか、發財の神への信仰となるのとあわせ、都市論とは別に中國人の心情にあらためて興味を感じた。

以上の三編は都市そのものの論というより、都市的なものを扱った論文である。商業活動・教育活動と科擧にまつる信仰、これらが都市を舞臺に展開していくのは當然である。だがこれらを都市的

なものと認定をして論をすすめるには今少し作業が必要であらう。後稿を期待したい。

都市の發展過程を論じたものの二編。いずれも歴史學のみを學んできた者に感じられぬ眼差しが感じられ、新鮮である。

林和生「中國近世における地方都市の發達——太湖平原烏青鎮の場合——」は、江南の鎮の變遷を論じる。湖州の東端にあつた烏青鎮は、交通の要所でありつても行政區分の交錯する地であつた。それが故か、典型的鎮として發達していく。湖州についてはすでに斯波氏の專論があるが、さらに長いタイム・スパンで論じる。併讀をすすめたい。

秋山元秀「上海縣の成立——江南歴史地誌の一齣として——」は、中國のみならず世界屈指の巨大都市の上海の形成を論じる。海岸線の進展と水路の變化にともなつて中心地が華亭縣から青龍鎮へと移動し、やがて上海が登場していく様子があたかも畫卷をひるげていくように語られる。参考として添附された壯大な「上海附近主要水系圖」は、水利研究の資料としても役立つ。かつて、上海から太湖にかけての水利・水系を一九七九年八月四日にランド・サットで撮影した寫眞で解析し、その複雑な水系・水質に驚いたことがある。たしかに複雑な、それ故にまた人間の孜孜營營とした營みを感ぜさせる水系圖ではある。ただ正確な地名・等高線が添附してないため、素人目には何とも解讀しにくい水系圖でもある。

兩論はともに長い目で都市の變遷を追つた論文である。個個の時代についてはなおつめるべき點も多いが、それは一人の力ではむずかしい。各時代・各分野を專攻する者の協力も必要であり、今後の課題であらう。さらに兩編に斯波氏の提示される方法をあてていく

と、どのような變化・結果がでるのであろうか。知りたく思う。

杉山正明「クビライと大都」は、元朝の國都大都を論じる。大都は遊牧民族たるモンゴル人の建設にかかり、明・清とつながる北京の祖型となった都市である。中國の國都には『周禮』冬官・考工記に示される基本的考えがあり、それと實際の都市設計を如何に考えるかが一つの問題であった。完全に一致する都市は實際にはみあたらないが、もっとも近いのがモンゴル人の建設にかかわる大都であることも指摘されてきている。氏は、大都が基本的にはモンゴル人が住むための都市でなく、帝國の偉容を示すための、つまり見せるための都市だったとする。勿論、巨大な帝國の首都がただのお飾りとしてのみ造營されることはありえない。諸機能果して經濟・行政上、重要な役割りを果たしたこと、地理的にも千年の歴史に耐えうる土地だったことも論じられる。ところで、こうした論の一方で、モンゴル人の風習をいかし、内部に越冬キャンプの設營に似た構造をもっていたとする。示されるモンゴルのいくつかの都市プランを勘案すると興味深い指摘であるが、では何故歴代の皇帝が都市の中に住まなかった（設營しなかった）のか、疑問がのこった。

各論を概観してきたが、中には都市にダイレクトに結びつかぬものもあった。さりとて今一つのタイトルの文化に入らぬものもある。都市と文化というタイトルから、どうしても都市文化的なものを連想してしまうせいもある。その結果、本書の讀了後のイメージが亂反射をしまし、實像をむすびにくい。とはいえ、本来、都市に對するイメージが混沌であるとするなら、これこそ都市ではないか、ともいいえよう。もともと、アジアあるいは中國におい

て、都市とは何かという大前提があり、そのアプローチへの一歩とも考えうるからである。

本書は、我國における最初の中國都市専門の論集であり、都市研究の現状や今後の問題など、なげかけた問題は多い。與えられた紙數で紹介しうるものではなく、まことに概括的な紹介に終ってしまった。この點は評者の力のいたらなさにも一因があり、編者・執筆者の御寛恕を乞う次第である。ただ最初に示唆したように、この種の論文集は目的や編成を明瞭にすることも必要なのではあるまいか。また難しいことではあるが、それに従って各部分・分擔をキチンと定めて執筆することも一考する必要がある。本書があらゆる意味において中國都市史研究上の金字塔となることは疑いが無い。それだけに明確な意圖の提示がはしかった。

それにしても、本を閉じて長嘆息せざるをえなかった。何と贅澤な本であらうか、と。今日の出版事情からいえば、これほど多くしかも大きな地圖を使用することは不可能に近い。公けの助成金あつての故であらうが、一方でこうした苦心の良書が、配布されるのみで個人の手に入りがたいのも疑問としてのこった。

註

(1) 斯波義信「中國都市をめぐる研究概況——法制史を中心に——」『法制史研究』二三、一九七三年。

(2) 加藤繁「宋代に於ける都市の發達に就いて」『支那經濟史考證』昭和二十七年。ほか。斯波義信「中國都市をめぐる日本の研究——宋代を中心に——」(Sung Studies Newsletter)。

(3) 例えば脇田晴子『日本中世都市論』(東京大學出版會、一九

八一年)の序論の中でも、中國都市への言及がない。

- (4) オットー・ブルンナー (成瀬治・平城昭介ほか共譯)『ヨーロッパ——その歴史と精神——』(岩波書店、昭和四九年)。所收論文のうちⅫ、「ヨーロッパの市民とロシアの市民」は、その前章のⅪ、「ヨーロッパ史における都市と市民」と共に多くの示唆を與える。

- (5) 伊原弘「江南における都市形態の變遷——宋平江圖解析作業——」(宋代史研究報告第一集『宋代の社會と文化』昭和五八年)。

- (6) Jacques Gernet: *Daily Life in China—On the Eve of the Mongol Invasion 1250—1276*, Stanford University Press, 1962.

- (7) アンドリュウ・ボイド、田中淡譯『中國の建築と都市』(鹿島出版會、昭和五四年)。

- (8) 森鹿三『東洋學研究——歴史地理篇』所收(東洋史研究會、昭和四五年)。

- (9) 斯波義信「浙江湖州における定住の沿革」(『中國哲學史の展望と模索』一九七六年)。

一九八四年三月 京都大學人文科學研究所

B 五版 五一八頁

渡部忠世・櫻井由躬雄編

中國江南の稻作文化——その學際的研究——

足 立 啓 二

本書は、一九七九年七月、京都大學東南アジア研究センターで開

かれた「江南デルタ・シンポジウム」における討論の記録である。

まえがきによると、同シンポジウムは、東南アジア諸デルタの比較研究を行っている東南アジア研究センターのスタッフの呼びかけによって開かれた。長江下流域の農耕方式・水利開發等についての幾つかのテーマをたて、まず中國史研究者が概括的報告を行い、これに對し、生態學・作物學・地理學・氣象學等の研究者が、専門の立場から批判的な論點を提示し、これらを受けて討論が進められる。ある種の學際的討論にあり勝ちの、土臺についての考察を抜きにした文化比較とは異り、農耕方式の構成要素について具體的な檢證が積み重ねられる。この討論の進め方は、東南アジアを専門とするフィールド系研究者が、問題の焦點となる漢籍を事前に讀んで獨自の見解を準備されたことにみられる参加者の積極的姿勢と相俟って、中國史では餘り例のない、この廣範な分野の研究者による學際的討論を、實り多いものとしている。討論で確認された成果はもとより、討論の過程でフィールド系研究者から出された多くの示唆に富んだ論點も、今後の中國社會經濟史研究の發展に、少なからぬ役割りを果たすものとなろう。

本書は次の六章より成る。

第一章 火耕水耨をめぐって

第二章 宋・元代の圩田・圍田をめぐって

第三章 占城稻をめぐって

第四章 明・清時代の分圩をめぐって

第五章 商品作物の展開

終章 江南農業と日本

まず、章を追って紹介させていただく。ただ多數の参加者によるシ